

白井 勇
関係の中でのものづくり

設計製図指導は、4年生の前期と2年生の後期を4年間、さらにここ2年間は2年生の前後期を担当しました。4年生の前期は、建築と都市との関係を理解し、都市の中に一群の建築を提案するもので、グループ設計・複数の指導者によるクリティック中心の授業等、4年間の設計製図の中では特徴のある形式をもっています。ここで印象的だったのは、共同設計という方法が初めての経験のためか、学生の発表の様子から学生相互の意思疎通に苦勞し、エネルギーの方向性がなかなか定まらないグループがほとんどで、人との関係が不得意なタイプが多いのではないかと感じられたことでした。

設計をする行為は、あらゆるプロセスで人との関係をうまく対応することが重要になってくることを考えると、多少気になるシーンではあります。クライアント・共同設計者（構造・設備・インテリア・家具・照明）等から施工段階の現場管理者に至るまで、多くの人との関係の中で進められるのはいうまでもありません。この関係の中でイメージしたものを作り上げるには、古典的ではありますが情熱と忍耐力が求められ、一つの大きな精神的な太い流れのようなものが必要になってくると考えられます。中途半端な思いだけではバーチャルな完成はあっても現実のものとしての完成にはならないような気がします。もう一つ、関係の中で意思疎通のツールとして図面の存在を再認識しなければならぬと感じられました。図面はイメージの伝達のための媒介として考えられますが、一方で自分の感覚をスケッチし図面化する過程で考えが整理でき、思考が深まり、一つのものがより豊かなものへと完成させるためのツールでもあります。人との関係を楽しみ、ものづくりをスムーズに遂行するために図面を関係の中で言葉として扱う時代はまだ続いているはずであり、関係をデジタル化しないものづくりが必要ではないでしょうか。学生と接した6年間で一人一人でのものづくりはできないとの思いがどこまで伝わったかが気になります。

白江龍三

私は基礎製図法（後にデザイン基礎Ⅱ）と設計製図Ⅰを担当させていただきました。これはまあさらな学生さんが最初に取り組む設計の科目でしたが、昨年からデザインの基礎的授業が我々の科目の前に実施されることになりました。そして2年ほど前からこの件が先生方の間で議論されるようになりました。この頃から学生さんは敏感に反応して、課題への取り組みや表現が美術系の大学かと思うほど洗練され、デザインが自由になりました。それまでは6畳、4畳半といった間取りの概念にとられて、自由なデザインに入れない学生さんが何人かいたのですが、そのような人が一人もいなくなりました。おそらく事前の授業でデザインを体験するうちに、間取りの概念が自然にデザインの一部として位置づけられて、これだけにとらわることがなくなったのだと思います。

ます。この鮮やかな変化を目の当たりにして、“多少デザインに不慣れな学生がいるのは理工系の建築学科の特色で、多様性の現れだ”と思っていた自分の認識の甘さを反省させられました。学生さんの可能性の大きさや柔軟性に驚かされるとともに、カリキュラムの重要性や非常勤とはいえ教育に関わる者の責任の重大性を再認識しました。

話は変わりますが、日大では建築学科の規模の大きさと多様性が大きな力になっていると感じることがしばしばあります。学生さんを指導していても毎年個性的な人が出てきますし、また多くの学生さんの中には同じ指向の人もいますので、特定の才能が孤立せず能力を磨くことができるようです。受け入れ側の講師も多様ですし、どの分野にもトップレベルの関係者がいて、広い情報に接することができます。また各分野に実態を担う実務家の卒業生がいるのも魅力です。意匠・構造・設備・環境・法規・経済など、建築を取り巻く包括的な知識があふれ、少数精鋭の有名大学も含めて、他大学では考えられない日大の強みになっています。このような総合力を獲得するには必要な規模があって、人数の多さが基本的な力になっていると思います。昨今、若年人口の減少に伴って大学の在り方が議論になると聞きますが、人数をしばって偏差値を上げるだけでなく、レベルの高い多様性を残してほしいと思います。多様性に關連してもう一つ付け加えてさせていただきますと、理工学部の授業は生物環境に關連する分野が弱いように感じます。現在この分野は、環境に対して建築物や建築の生産過程が与える影響と、建築物が健康に与える影響、ランドスケープアーキテクチャーに代表されるデザイン要素としての生物の取り扱いなど、およそ3つの方面からの取り組みがあります。これらは近い将来、建築の重要な分野を形成すると思います。この分野の充実をぜひお願いしたいところです。最後になりましたが、在任中ご指導ご支援いただいた専任の先生方、同僚の非常勤の先生方、また授業への熱心な取り組みを通して感動を与え続けてくれた学生の皆さん、このような機会を与えていただいた大学関係の方々から心からお礼申し上げます。

田中 雅美
日々思うこと

建築の設計に携わっているものの一人として、日々思うことがある。私たちが現に生活している社会の中で、建築の意味や価値はそれを取り巻く人々の中で実に幅広いものである。たとえば政治の側面から見る人々にとって、建築はポリティクスであり公共事業の対象として考えられる。ハウスメーカーやディベロッパーを中心とした建築産業において建築は商品として扱われ、その商品を買う人にとっては自分の社会的地位と生活レベルを具体的に知らしめる最も高価な買い物であろう。これらの見方はどれも建築を社会に存在させる概念にちがいない。社会の中で収斂する方向性もないままに拡散した建築概念の中で、設計者の持ち続ける空間思想や設計思想は余程しっかりしなければ、異なった価値観の中で揺さぶられ続け、その価値や存在基盤を見失ってしまう。しかしながら建築家の自負する建築のもつ力は本来それ自身単独で存在するのではなく、設計行為を通して実際の建設に参加しながら異なったディメンションのせめぎ合いの中でこそ、その存在価値を見出し得るものだ。だから建築を学ぶとは、自身の信ずる建築思想を通して社会の成り立ちを理解していくこと、そしてその中で建築を表現していく方法を発見していくことに他ならないのだと思う。自己の想像力に立脚する設計行為は自己の世界に留まる限り楽しくもあり、いとおいしいものであるが、ひとたび自分自身の人生と設計行為がリンクし社会にコミットした瞬間から、己に切っ先が向けられる諸刃の剣になりうるのである。いずれにしても、建築家の意志が込められた空間に接したときの喜びや感動を信じて進むのみである。若い君たちの世代から、一人でも多くの同士が生まれてくることを期待している。